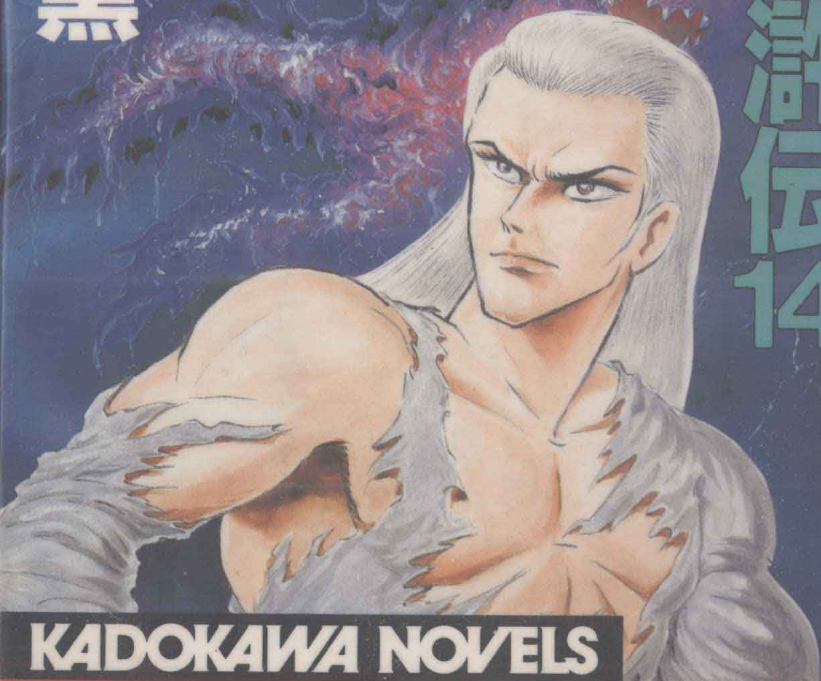


栗本 薫

魔界水滸伝14



KADOKAWA NOVELS

異時空に同時多発する夢魔の如き絵図。
殺戮の巨魁クウルーへの反撃も空し。
現代の語部が贈る伝奇SF巨編



ガクカヘルズ

昭和六十三年六月二十五日初版発行

著者 栗本薫 くりもと かほる

発行者 角川春樹

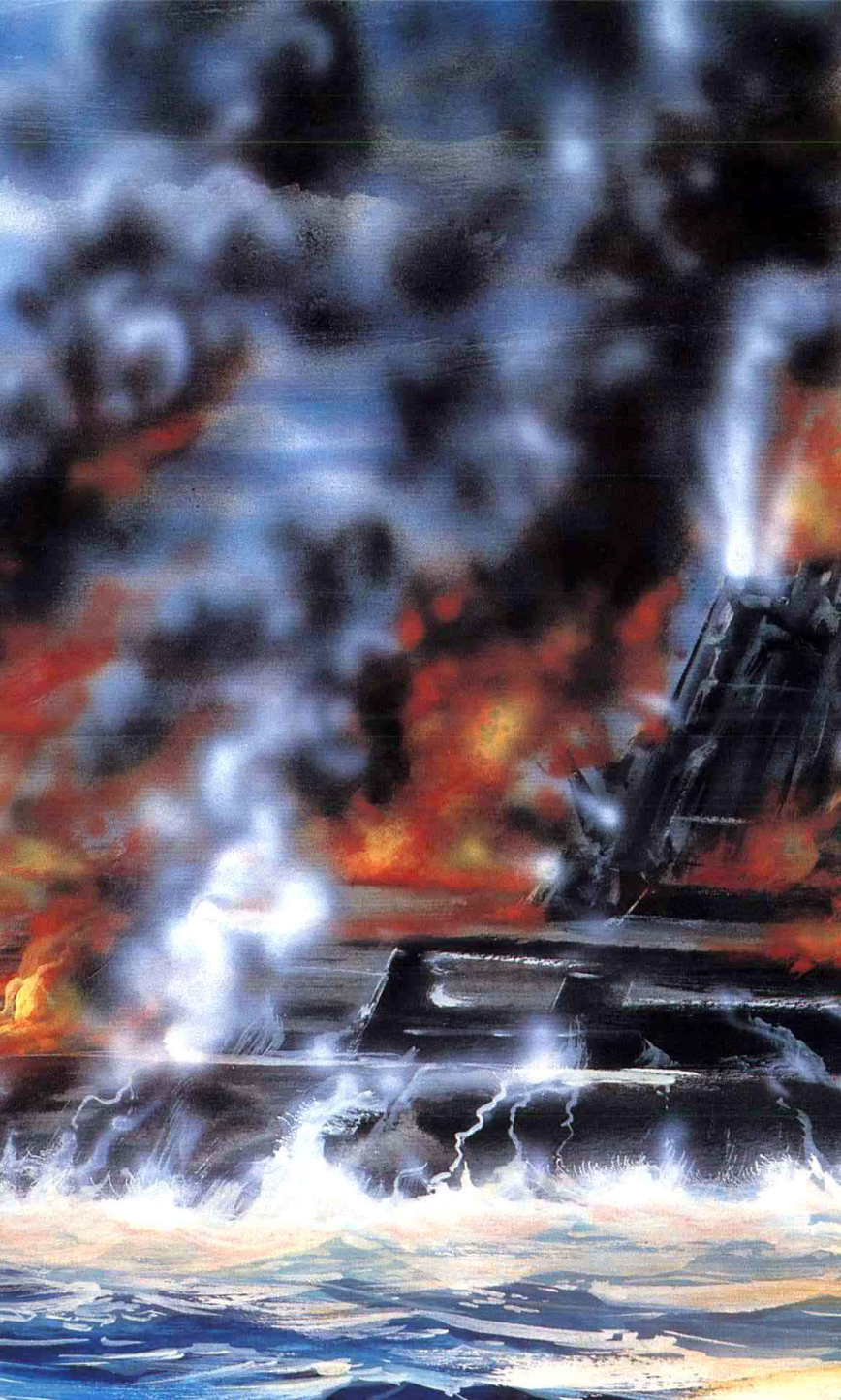
魔界水滸伝 まかいすいこでん
14

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 株式会社宮田製本所
装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店
東京都千代田区富士見三二三 振替東京三二五三〇八
〒〇三 電話 営業〇三三六八五三 編集〇三三六八四三



(お前は涼じゃない。お前は誰だ…) 目の前で、どろどろと、たったいまで腕にかき抱^{うで}いていた愛するものであったものが、といはれ始めるのを、八岐は見た。大きな気弱げな目が、青白い肌^{いだ}が—— (本文第九章より)







岩の上に、一人の、美少年が立っていた。切れあがったまなじりが、武者人形を思わせる。「ふ、風太くん、きみ——」(本文第十一章より)

雄介を中心に、竜二、円城寺、柴、小角、アイリーン、の五人が、念を集中し、気を一つにして、ぐんぐんと宙に舞いあがっていった。「見えました。——洋上に黒煙。《アーク》のものと思われます」(本文第十章より) ▶

KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝14

栗本薫

バー絵・口絵・本文イラスト／水井豪

第九章

1

チャブ、チャブ、チャブ。

チャブ、チャブ、チャブ。

波の、うちよせる音が、のどかにつづいていた。

青い、青い空——空よりももっと青い、海。

白くまぶしい雲。のんびりと空を舞うかもめも白い。

どこからか、さんさんと陽光がふりそそいでいる。

子供たち、少女たちの歓声、嬌声きやうせうがとおくひびく。

白い、美しい細かい砂の上に、すきとおる緑に白い泡うぶのレースのふちどりをほどこした波がたえまなく、

うちよせてはひいてゆく。

陽光は、暑すぎもせず、さりとて、寒さを感じるほどでもなかった。まさにころあいのつよさ——一年でいちばん素晴らしい季節。ときたま、さやさやと、潮の匂においはらんだそよ風が吹きつけてくるのも快い。空気はオゾンの匂においにみち、なだらかな砂丘さまやうのむこうに、限りなく美しい、目にしみいるような若葉のもえる山々がひろがっていた。

波打ち際を小さな、半分すきとおったカニがちよこまかと逃にげてゆく。砂になかば埋うもれた貝が、ぴゅつと水を吹く。白い砂には、乙女おとめの爪つめのように可憐れんなピンクの桜貝さくらがひがおちている。

はるかな沖おきに、白帆しらほがひとつふたつ見えた。おそらくは、のどかにあそぶヨットか、それとも魚をとる小舟こぶねのどちらかだろう。

水面に、魚でもみつけたのか、白いカモメが、ひゅつと弾丸だんがんのように舞いおりてきた。あぎやかに飛沫しぶきをちらして舞いあがったとき、そのくちばしには、

銀色の、ピチピチとはねる魚がくわえられていた。

天の輝き、地の愛、母なる海の恵み……

地球とは、これほどに、美しい星であったのだ

——と、あらためて、感にたえなくさせるような、それは、一幅の絵に似ていた。しずかで——限りなく静かで、しかも生命のさんざめきにみちている。

太陽と、海と、風。

大地と、木々と、空。

すべてがあまりにも美しい。めまいがするほどの、恩恵と生命が、ひたひたとおしつづんでくる。ちょうどこの渚にうちよせる、やさしくすきとおったエメラルド色の波のように。

（太陽が——心地よい）

日ごろ、ほとんど、陽光になどさらすことのない素肌でさえ、すべてを生み出す生命の源なる太陽神の、そのいくぶんきつい、そのきつささえも快い接吻を全身に吸いこんで、歓喜の声をあげているかのようであった。陽光と、風と、波と、梢のざわめき、

とおい子供たちの無邪気な歓声までもが、《生の歓び》を、魂の深奥にまで、しみこませようと、ひたひたとおしよせてくるようだ。

（ああ——）

つい、とろとろと、あまりの快さにまどろんでいたらしい、と思つた。ついぞないようなことだが、きつと、よほど疲れていたのにちがいない。

そういうえば、このところ、何やらやたらと多事多端で、ゆつくりとくつろぐいとまもなかった。

かれのようなものにとつては、こうして、海でも山でも、美しい巨大な自然の中に身を投げ出し、それと一体化したと感じ、大地や海のエネルギーを身内に注ぎこむことこそが、最高のレクリエーションであり、心身のリフレッシュの方法でもあるのだ。

以前はよく、単身、山野を逍遙したり、あてもなくぶらりと旅に出たりしたものであった。そうして、心ゆくまで、ストレスを解消し、疲れをいやし、諸国の珍しい事物を見聞したり、珍しい、その地方独

特の食物を味わってみたいした。それが、いちばんの楽しみでもあった。

いったいなぜ、いつから、あのような楽しみを忘れ、やめてしまったのだろう。

(ああ)

再び、満足の吐息をもらして、寝返りをうち、腹這いになる。背中がかと照りつけられ、たちまち熱くなってくる。

うっかりまどろんで、少し焼きすぎてしまったものか、ひきしまった腹から胸の肌がほてって、いくぶんいたんだ。しかし、それがかえって、太陽のエネルギーを全身にうけとめ、みたした証しのように、いつそ快くすらある。それに、さあっと雲がかかって日がかげつたとみると、またさあっと日がさしてくる。

(少しずつ、日がうつろって来た。——いま、何時くらいだろう。三時か、四時まえか。——もう二時間もすると、日がおちてくるだろう……)

海辺の落日は、この世で最も壮大なドラマのひとつだ。やがて、さんらんたる日没の黄金と茜色の乱舞のはてに、物さびしい黄昏と——そして悩ましい夜のとばりがおりてくる。星々と月、そして夜闇、漁村のあかり、夜光虫の海。

そのまえには、宿へかえらねばなるまい。そう、このところ逗留しているあの小さな、ひっそりとした、しかし感じのよい宿。そこには、なみなみとあふれる清らかな湯をたたえた、檜の香のする風呂と、海の幸をあこれにつらねた夕げの膳とが、ととのえられていよう。あつい湯が、焼きすぎた肌にしみて小さな声をたてさせる。湯あがりの一杯の酒——それこそ、真の甘露というものだ。大袈裟に言えば、それあればこそ、楽しみらしい楽しみもないこの世を生きてゆけるのだといってもいいくらいだ。かれほどに、酒を愛しているものも珍しい。

心やすらぐ完全な休日。——美しい自然と、静けさ、風と太陽と海、うまい酒と海の幸、のりのきい

たシートと日の匂いを吸いこんだ布団、そしてかたわらによりそう、愛するもの。

愛する者――

かれは、もう一度、寝返りをうった。そして、腹についた砂を手で払いおとす。

「――おい」

まだ夢のつづきのように、手をのばして声をかける。従順な答があつた。かれに、呼ばれるのを、ずっと待っていたかのような。

「少し、ひりひりする。――塗ってくれないか」

再び、従順ないらえがあつて、かれは身体をのばし、やさしい手のひらに身をゆだねる快さにひたつた。そつと、細心の注意を払って、繊細な二つの手が、油をかれの胸から腹にぬりこめてゆく。ひりつくほてりがなだめられて、とろりとした睡魔にかわつてゆく。くりかえしくりかえし、上から下へ、下から上へとまでさする、リズミカルな感触が、耳の中に鳴っているチャブ、チャブ、チャブ、という波

の音と混りあい、一つになり、からだ全体がとけてゆくかのような心地すらかおこさせる。身も、心も、とけてこの大地、空、星とひとつに化してゆくかのような……

なんと、贅沢な、なんと幸福なつかのまの休息だろう。

（なんと長いこと、ひたすら戦いつづけ、かけつづけてきたことだろう）

いったいなぜ、何のために、何にかりたてられて、このように休む間もなくかけとおしてきたのか。そのようなことをして、何になるというのか。

天に日と月と星、地には美酒、そして腕に抱く愛しい者。

なべて真に大切なものとは、それですべてではなかったろうか。そのほかの、何が一体必要だ、というのか。

（どうして、もっと早くに、休まなかったのだろう）

これほど、長きを生きて来ながら。

愛する者よ……………

かれは、身をおこした。日がかげり、風がつめたくなりはじめている。うちよせる波も荒くなつて来た。

「帰る」

「はい」

「服を」

「はい」

うしろから、着せかけてくれる着物に袖を通し、くるくると帯をまき、雪駄の砂を払って、歩き出す。そのうしろで、体の下にしていたマットはすつと消滅した。ざざーん、ざざーん、と、もの淋しいたそがれどきの海鳴りが、ひびきはじめている。

「風が、出てきたな」

「はい……………」

「寒くないか？」

「いえ」

「大丈夫か」

「はい」

「砂地は、歩きにくい。足もとに、気をつけろ」

「はい……………」

つと、肩に手をまわしてやると、いくぶんはにのみながら腕にすがってくる。細い、頼りなげな肩を抱いていると、そこから、自らの力が伝わってくる気がする。

しだいに風が出てきて、梢がかすかにざわめき、空には一番星がきらめいていた。さくり、さくり、と足もとで砂がくずれる。ふしぎな物悲しさ、人恋しさが、胸にみちてきて、かたく、よりそこからだをひきよせる。

（僕は——一人ではない）

（もう、二度と——孤独には、ならない）

さくり、さくり、と踏んでゆく砂は足もとでくずれ、もうおりてくる宵闇に桜貝もみえぬ。ゆくての丘のむこうに、小さな村の灯々がちらちらと、限り

なくなつかしい、あたたかい色に、またたきはじめていた。

「寒く、ないか?——僕の羽織をきているか?」

「いえ——大丈夫です」

「無理をするな。お前は——弱いのだから。僕は、とても、強いのだから」

「え……………」

秋の日はつるべ落し——という。では、いまは、秋だろうか? みるみる、とつぷりと暮れて、足もとの草むらに、虫がすだきはじめる。丘の向うから、ざーん、ざーん、という波の音がきこえてくる。海の彼方の空は、まだほのかに夕映の名残りをのこして紅く、すきとおった群青の東の空は、星々をちりばめはじめている。

美しい大地——美しい世界……………

「お帰りをさいます。——お風呂のお支度が、できておりますよ」

「ああ、どうも——つい、ゆっくりしてしまつた」

「それとも、お食事を、先に?」

「え——ああ、では、一風呂あびて、砂をおとして来ます。——お前も、入るか?」

「はい……………」

何といつても、かえってくる、従順な答え。しかしそれは、諦観や投げやりさのはての従順ではない。真の、ひっそりとした、真摯な従順さ、自己の運命への許容のすえのそれであることが、かれにだけはわかる。

酒も、少しばかり、すごしたかもしれぬ。——日にあたつて、ほてつた体に、冷たい酒がよく効いて、したたかに酔つた。

「ああ——酔つたな」

「大丈夫ですか——?」

「よいいな心配をするな。——お前に、心配をされるほど、まだおちぶれちゃおらんさ。——来い——手をつかんでひくと、かすかに抗うようすをみせて、従順に布団の上にくずれて来た。それをさらに、

胸にひきよせ、小さな頸をとらえて、口づけすると、目をとじてじっとしている。胸もとをまさぐると、いくぶん身をかたくした。——が、抗わぬ。

そのまかせきつたたよりなさが、ふっと、悩乱を誘って、手をふりあげた。細いが、限らない力を秘めたその手で、むろん手加減はしながらだが、右、左、といくぶん強く打った。頬に一瞬、あざやかなバラ色がうかびあがり、怯えたように目を開いてかれを見つめる。それをさらに、もう少しつよく叩く。

「——どうして……………」

か弱い声で言った。が、逃げようとはしない。

「逃げるのだろうか？」

思ってもおらぬことを、かれは、口にしていた。

言ったことで、かっとして、もう一度打った。

「僕から——逃げたいのだろうか？」

あいては、首をふる。力ない、たよりなげな首のふり方が、いっそう不安をかきたてる。これはほんとうに、自分のものか、そうでないのか？ この、

大人しげなは見かけの下に、とんでもない反逆の心、背信をかくしてはいないのか？——という。

「逃げて——どこへゆくんですか……………」

かぼそい声だった。

「あいつのところへ」

「あいつ——」

「そうさ。やつらのところへ、逃げてゆきたいのだから。しよせん、お前は人間だし——僕は——異類だからな」

「あなたは——人間でしよう？」

いくぶん、不安げな声。

「そうでしよう？」

「さあ——どうかな」

かれの手がのびて、スタンドのあかりをけすと、室は、真の闇につつまれた。

「——あ……………」

こんなに、側にいるのに、なぜ打つのか——と、恨むでもなく、いぶかしみながら問うている目が、

闇の中にかくれた。

そうして、闇の中でなくては、安心して、抱けない。——愛、などというものには、およそ慣れて来なかつたのだ。むしろ、戦い、力をつくして、あいてを征服するような、それが他とかかわりの真のすがただ、と信じて生きてきた。からみつくように、頼られ、身を投げかけられ、心ごとゆだねられることに、慣れてはいない。

守り、いつくしみ、大切にするものなど、自分自身とそのプライドよりほかに、ひとつとして、持っていないなかつたのだ。

それが、なぜ——

問いたいののは、かれのほうだった。

なぜ、こんなにも、いとしく思うようになってしまったのだろうか。

かれの腕に抱かれ、かれの思うままになる、小さな、ちっぽけないのち。——かれの強い腕の力に抗うすべもない、無力で、たよりなく、はかない、風

にも吹き消されてしまいうような生き物。

あまりにもかれと似たところのない——もちろん、きやしゃな、従順な生命、このくらいかれと異なるものは、考えることもできぬくらいだ。理不尽に扱おうと、放っておこうと、わけもなく打ったり、苦痛を与えても、かれの気まぐれをうらむすべも知らず、ただひっそりと苦しむだけの、鉢植の植物のような、ひそやかな存在。

その、すがりついてくるような目で見つめられていると、はてしもなく心が碎け、もろくなり、逆にそのかぼそいからだにしがみつき、すがりついてしまふようになるのだ。それが恐ろしい。いったん、どれほどいとしく、大切に思っているかを意識にのぼせたら、くずれていってしまふそうだ。それが、怖い。

(どうせ——ものの十年とたたぬうちに、いまのようにはかなさも、かれんさも、何もない、ありふれたそのへんの人間と化してしまふのだ。そして、わ

ずか五十年かそこいらで——老いさらばえて死んでゆくのだ)

かえって、それならば、見ずともよい嘆きを見るおろかしさ、むなしさ——

(だのに——なぜ)

だのに、なぜ、こんなにも、いとしく思うようになってしまったのだろう。

やめろ、やめろ、という制止の声に、耳をかしつづけながら——気づくと、いつのまにか。

(それでは——)

それでは、これが、人間たちのいう、《愛》というものだろうか。

知らなかった——と、かれは思った。

(知らなかった)

あまりにも、長いいのち、ひととかけはなれたいのちを生きるがゆえに。いつも、不死ならざる人間たちの情熱をおろかしいと思い、そのはかなさ、短さをあざけり、そのはかなさにもかかわらずかれら

のくりかえす恋を、かれらのおろかしさを何もみえぬことのあかしと考えていた。

だが、いま——

これは、その、思いあがりの罰だろうか、とかれは思った。だが何と——何と甘美な罰であるだろう。ひとを愛し、ひとに心とられ、ひとに縛られ——そのことの、何という甘やかさ、快楽、そして甘美な降伏だろう。これほど無力で、はかなく、かれだけを頼りにしているからこそ、かれが守らなくてはならない。そのはかない五十年のことは、少くともいまは、もう考えるのをよそう——今だけは。少くとも、いまだけは。

(ああ——)

(多——一郎——さん………)

(ああ——あ………)

(涼——涼——涼!)

あせばんだからだ。荒くたかまる息づかい、あえぎ。そして、溶闇。